

Title	純粹論理学と超越論的論理学 : フッサール論理学の展開
Author(s)	里見, 軍之
Citation	哲学論叢. 1987, 18, p. 61-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66852
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

純粹論理学と超越論的論理学

——フッサール論理学の展開——

里 見 軍 之

フッサールの研究経歴はもともと数学から始まったが、ほどなく論理学へと移っていったことは周知の通りである。そして、その後の彼の論理学観の展開は現象学そのものの発展と対応していると言えるだろうし、彼の現象学は論理学の問題群の考究を媒介にして展開したとも言えよう。そこで本稿ではフッサールの「論理学」の概念の検討を通じて、超越論的哲学としての現象学の意味、またはその可能性を考えてみたい。

カントは一般的論理学（通常の古典的形式論理学）と超越論的論理学とを区別し、前者をさらに純粹論理学と応用論理学とに区別した。一般的論理学の方は、認識の一切の内容を度外視して、思惟一般（あるいは悟性規則一般）の形式だけを取り扱うものであり、しかもこれはなるほど諸学のための前提ではあるが、これの単なる予備学という性格しか持っていない。一方、超越論的論理学は単に思惟のアプリオリな形式だけに関わるものではなく、そもそもアプリオリな認識がいかにして可能であるかという、われわれの認識仕方、つまりその可能性の制約を問題にする。また、一般的論理学のうち応用論理学は悟性使用の際の主観的経験的制約にのみ関わり、常識を純化する手

段に過ぎないから、本当に論理学と言えるものは純粹論理学だけである。ところでフッサールが純粹論理学とか超越論的論理学という概念を用いる際に、カントのそれが念頭にあったことは疑いない。とりわけ超越論的論理学という術語に関しては、一九〇八年に初めて登場した「超越論的」現象学という概念がカント研究の成果として出てきたものであるだけに特にそうである。しかしこうした区分の仕方は引き継いでいるものの、それぞれの内包、外延は相当に異なっており、したがってまずカントとの異同から論を始めたい。

一 純粹論理学の構想

形式論理学（純粹論理学）はアリストテレス以来進歩も退歩もしていない、とカントは言う。カントのカテゴリ―表はラムスの論理学やポール・ロワイヤルの論理学の影響を受けていると言われているが、彼にとってはこれ等もアリストテレス論理学の微調整に過ぎなかつたのであろう。これに対してフッサールは『論理学研究』（一九〇〇／〇一年）において、「われわれはごく一般的な点では、純粹論理学と応用論理学とのカントの区別に連れ戻される。実際われわれはこれに関する彼の表明のうち最も際立っている点に賛成することができる」（XIII, 216）が、しかし、「この言うに言われぬ貧弱な論理学が、われわれが見習うべき模範となるものであろうか。学をアリストテレス的―スコラの論理学の立場にまでねじ向けるこのような考えには誰も関わり合いになりたくないであろう。そして実際カント自身が、論理学はアリストテレス以来完結した学という性格を有する、と説いているのだから、そういうことになるように思われる」（XIII, 217）と言う。それというのも十九世紀、特にその後半フッサールが活動を始めた頃には論理学も新たな展開をみせ始めていたからであった。こうした時代の違いもあって、フッサ―

ルが『論理学研究』で構想している「純粹論理学」にはカントのそれとは著しく異なった特徴がある。それはおそらく次の三点にまとめられるであろう、即ち、①まず外延的には、単に思惟の形式であるにとどまらず、およそ学なるもの一般の制約とされている点、②次にその問題の設定様式としては、思惟の形式を言語の形式として、特に「意味」の問題として捉えるという点、③最後に内包的には、アリストテレス的段階を越えて数学的、演繹的体系をも構想している点である。以下これらの諸点について順次検討していきたい。

① フッサールは「学一般の可能性の制約」として一方ではレアルな制約（經驗的—主観的制約）と、他方ではイデアールな制約を挙げ、後者をさらにノエシ的制約と純粹論理的制約に分ける。この純粹論理的なものにはカントの場合でも、思考の正しい手続きという程度の意味では当然学の制約となるべきものであろうし、むしろ言わずもがなのものですらあろう。しかしフッサールが殊更「学一般の可能性の制約」という大きなスケールの問題の絡みのなかで「純粹論理的制約」を取り上げるのは、彼がこれに極めて大きな外延を与えているからである。即ち通常の形式論理学（あるいは記号論理学）のみならず、日常言語の文法や真理論（意味論）、さらには数学等に至るまでのものがそれに含まれている。換言すれば、彼が主題にしているのは狭い意味での論理学ではなく、普遍数学としての「論理的なもの」一般、理論の可能な形式一般を含み、したがって古典的論理学に対してはもとより、今日論理学と称されているものと比べてさえ遙かに外延の大きいものである。

彼によればそもそも純粹論理学（『形式論理学と超越論的論理学』では形式論理学）の課題とするものには純粹意味範疇と純粹または形式的対象的範疇とがある。純粹意味範疇は言語使用の形式に関わり、純粹対象的範疇は或るもの一般、対象一般に関わる。前者はわれわれが意味を表現し、解釈する場合の形式に関するカテゴリーであり、

後者は意味されたもの、しかも個々の意味されたものではなく意味されたもの一般の形式に関するカテゴリーであり、両者合していわゆる普通数学を構成する。前者を意味のノエンス面の形式、後者をノエマとしての意味の形式と言えるかもしれない。『形式論理学と超越論的論理学』（一九二九年）では意味範疇に関わる理論は形式的命題論、対象的範疇に関わる理論は形式的存在論と名付けられている。このうち彼が後者の例としているのは事態、数多性、基数、関係、結合等の概念であり、これ等を適当なグループに分けることは難しいが、少なくとも数学的概念が一領域を成しているとは言えるであろう。このようにフッサールは論理学の外延を対象一般にまで拡げているのであり、したがって論理学を絶対的に自足的な領域とは見做さないのである。ただ形式的存在論の領域については彼は多くを語らず、われわれの問題にとっても今は重要ではないので、ここでは度外視しておき、形式的命題論についてのみ検討しておきたい。

『論理学研究、第二巻』、第四研究（独立の意味と非独立の意味の差異、および純粹文法の理念）においてフッサールは論理学を以下のように二層（数え方によっては三層）に分けている。先ず、

意味の純粹形式論。複合命題に限らず一つの命題の場合もあるのだが、要するにこれは適格な文の本質法則的構造と、これに基づく意味結合や意味変様の法則をできるだけ少数の基本法則へと還元することであり、純粹論理的の文法とか文法的形式論と別称される。あるいは意味と「無意味」とを区別することとも言われる。例えば、「アブラカタブラ」というような無意味な音声の塊とか、「この軽率なは縁である」、「ある木がそしてである」等という無意味な単語の系列を意味統一を失わないために排除する法則であり、現今の用語で言えば、日常言語の文法または統語論である。しかし純粹形式論が扱うのは人工言語でも理想言語でもないのだから、彼もその普遍性には制

限があることも承知している。にもかかわらず、文の構造に一定の法則があることもまた確かであるし、しかもいかなる学であれ全く日常言語を用いないで済ますというわけにはいかないのだから、これも「論理的なもの」の中に入れなければならないであろう。つまりフッサールはいたずらに文法と狭義の論理学とを混同しているわけではないのである。「論理学と文法との正しい関係という問いに関する議論がはなはだ混乱しているのは、われわれが下部領域と上部領域としてはっきり区別し、そしてこれ等の否定的対立者——無意味と形式的反意味との領域——によって特徴づけた二つの論理的領域を絶えず混同してきたことにある。形式的真理または形式的対象性を目指している上部領域という意味での論理的なものは確かに文法には無関係である。だが論理的なもの一般がそうだといえない。しかし下部領域はそれが狭いとか自明だとかと思いなされて、また実践的に無用だからといって不評なのであれば、それに対して先ずもって答えられることは、実用的有用性に捉われることは純粋な理論への関心を使命とし、その代表者たる哲学者には好もしからざることであろうということである。哲学者は、自明なもの背後にまさしく最も困難な問題が隠されており、かくして、パラドックスのようではあるが深い意味が無いわけでもないこととして、哲学を平凡なことの学と言い表すことができるということをも実際弁えておかなければならないであろう」(XIX/1, 350)。次で、

意味の純粹妥当性論。これは前者の上部領域をなす「通常の、かつ正確な意味での」論理学である。単なる雑音ではなく、かつ文法的に適格であっても対象に適合する言明とは限らないから、意味の客観的妥当性を問題にする学が必要である。この場合の法則はこうした言明に対応しない対象はあり得ないという意味で「実在法則」とも呼ばれ、これによって意味の否定的対立物たる「反意味」を排除する。さらにこの下位区分として形式的または分析

的反意味と実質的または総合的反意味とがある。前者には例えば矛盾律や二重否定の法則などが挙げられ、後者の例としては「丸い四角」、「すべての四角形は五角を持つ」等が挙げられている。『形式論理学と超越論的論理学』では両者は術語的に明確に区別されて、前者は整合論理学（または無矛盾性の論理学）、後者は真理論理学と呼ばれる。現今の論理学の立場から見れば前者のみが本来の数学的論理学であり、後者は意味論ということになるのである。『論理学研究』では主として純粹形式論のほうが多々論じられたのに対し、『形式論理学と超越論的論理学』では純粹妥当性論が重視されて、三層性が強調される。「今までの論理学にはこうした層的構造はずっと馴染みのないものであり、『論理学研究』でも専ら純粹形式論の区分が行われたに過ぎなかったが、区分は今示した連関からみると、遙かに深く基礎づけられた。無矛盾性の形式論理学と真理の形式論理学とのわれわれの区分は、言葉の上ではよく知られているけれども、或る根本的に新しいものであるということとは言うまでもない」(XIII, 76)。このように純粹論理学は形式のための形式を論ずるだけのものではなく、ゲームをモデルとする論理学でもないのである。

② 学は何等かの意味ある表現を命題化したものであり、また表現は無意味な音声の羅列でないとすれば、何等かの意味を有しているのでなければならぬ。フッサールは、ミルが論理学を言語の究明から始める必要性を主張しているところに純粹論理学にとっての決定的な観点を見いだした。「したがって私が前提しているのは、われわれが純粹論理学を、素朴に事象的に妥当するということかたちで生じる命題体系としての数学的学科のやり方だけに倣って形成することには満足せず、それと共に、この諸命題に関して哲学的明晰性を、即ちこうした諸命題の作成の際や、これ等のイデアールに可能な適用の際に働く認識様式の本質と、これによって本質的に構成される意味付与

や客観的妥当性の本質の洞察を得ようと努める、ということである」(XIX/1, 54)。つまり、彼も「数学化的論理学」の有効性、正当性に異を唱えるどころではなく、むしろこれを積極的に推進すべきだとしているのだが、しかしこれだけでは不十分だと考えているのである。実際純粹数学の論文といえども論理記号と集合論等の記号だけで書かれているわけではなく、日常言語も使われているだろうし、また別の面で、この論理記号が仮に一種の規約に過ぎないということを確認にしても、やはりそれが単なるゲームではなく、学にとって何らかの「意味」があるべきものなら、その意味を問題としなければならない。烙印が奴隷の記号であり、ハンカチの結び目が或ることの思いつきのしるしである等というのは違って、言語はその記号で「表現」されている「意味」を有しているはずである。なお、上記の引用の後半部分では意味のノエシスの側面、すなわち意味づける作用が語られている。フッサールにとってこの側面は単なる語用論に解消されてしまうものではなく、結局『論理学研究』の後展開される超越論的問題として位置づけられると言えるだろう。

意味というものの定義ははなはだ難しい。「意味とはやはり、われわれが表現によって思念するところのもの、あるいはわれわれが表現を理解するところのものにはかならない」(XIX/1, 148)し、「意味とは何であるか」は「それ以上定義されず、記述的に最後のものである」(XIX/1, 187)。この場合表現と意味との関係について言えば、例えば「平方剰余」とか「赤」とかという表現はめいめいが「ここでいま」発言するレアルな作用であるのに対し、表現の意味はシュベチエスとしてイデアールな同一性、一定の普遍性を保っているはずである。「表現は偶然的なものであり、思想即ちイデアールで同一的な意味が本質的なものである」(XIX/1, 100)。そしてこうした意味を通じてわれわれは対象に關係するのである。あるいはむしろ対象を意味として捉えると言ったほうがよいかも

されない。ところで従来の論理学は専ら概念のクラス、または命題間の統語論的側面だけを取り扱うものであり、フッサールの場合も概ねそうなのであるが、しかし既に触れたように意味論をも論理学に含めるばかりでなく、後にはさらに意味の発生様態までもこれの主題の中に入れて、超越論的論理学を構想することになる。『イーデン、第一巻』（一九一三年）では純粹論理学（形式論理学）も超越論的論理学も表だつては論じられることはなく、意識の志向性即ちノエシス・ノエマの構造連関が専らの主題であつた。しかも「……いかなる志向的体験も——これをそ志向性の根本をなす点のだが——その『志向的客観』即ちその対象の意味を有している。この言い換えに過ぎないのだが、意味を持つということ、あるいは或るものを『意味において持つということ』が意識すべての根本性格であり、だからこそ意識は一般に体験であるのみならず、意味を持つ体験、『ノエシス的』体験である」(III, 223)と云われているように、明らかに「意味」という言語論的観点が支配的である。これとの関係で注意すべき点は、彼が『論理学研究』では同義として用いていた二つの術語「意味(Sinn)」と「意義(Bedeutung)」(『論理学研究』に関して述べるところでは専らBedeutungを意味と訳した)とをフレーゲとは違った仕方では区別していることである。「指示」と「記述」との関連で言えば、指示される対象が「意味の担い手」、「ノエマの意味における規定可能なX」、「純粹なX」であり、この何か或るものが述語によって記述されるのであるが、しかし実はフッサールがこうしたことを述べているのは主として知覚の段階に關してであり、「意味」という語は知覚をも含めた広い意味で使われ、本来の主語と述語、指示と記述というかたちに文節化され、表現されるロゴスの段階で初めて「意義」ということが言われる。「かくしてわれわれも何時でも、あらゆる志向的体験に關して『意味』——それでもやはり一般には『意義』と同値のものとして用いられる言葉なのだが——ということを語った。判明さのために、われわれ

これは旧来の概念のためには、そして特に『論理的意義』または『表現的意義』という複合した言い方をする場合には意義という言葉を優先的に用いたい。意味という言葉がわれわれは依然としてより包括的に用いる」(III, 304)。したがって概念的意義でなくとも、意味に定立的性格が付け加わりさえすれば「命題」と呼ばれ、直観意味、直観命題という用語さえ用いられるのである。勿論この場合、いかにして意味から意義への移行が行われるかということも問題であるが、フッサールの視点は意義を意味に、特に知覚意味に根づかせるといふ方向に向けられていった。ここにも彼が論理学を純粹な形式主義的発想法では捉えていないことが読み取れるであろう。

晩年の『形式論理学と超越論的論理学』においても形式論理学(純粹論理学)に関しては、『論理学研究』以来三十年、個々の点での仕上げは進んできたものの、その基本的構図は変わっていないと彼は言っている。彼を悩ましたのは諸々のカテゴリーの整合性よりもむしろその出生証明、または身分証明であった。「これ(＝形式論理学の基本的構図)に関する私のもっと詳細な叙述に関心を持つ人々に対して私がお注意しておきたいことは、『無矛盾性』の純粹論理学の意味規定と区分に関して私をもっと導いた問題は明証問題、即ち形式的・数学的学の明証の問題であった」(XVII, 16)。ここにもまた彼が意義を意味に、さらに直観に基づかせようとする姿勢がよく表れていると言えよう。この点でも、またもともと彼が論理学を終始一貫意味に基づかせている点でもカントのそれは根本的に異なっていると言えよう。

③ 彼は既に『論理学研究』の執筆以前にブル、ド・モルガン、シュレーダー、フレーゲ等の業績をよく知っていたところからみて、彼が引用符付きで「数学化的論理学」とか、論理学の「数学化的」理論と呼ぶものはこれ等の人々による初期の記号論理学であろう。そして彼もこうした新しい論理学を推奨する点で決して人後に落ちる

フッサールは『論理学研究、第一卷』の最終章「純粹論理学の理念」において純粹論理学の課題を三グループに分け、それぞれ次のように粗描している。第一に、「原初的な概念」全部を明晰にし、確定し、さらに記号化する。「与えられた理論は与えられた諸命題の或る演繹的な結合であり、この命題自身は与えられた諸概念の特定の性質の結合である。理論に所属する『形式』の理念はそれらの所与の代わりに無規定なものを代入することによって成立し、かくして諸概念の諸概念やその他の諸概念の諸概念が端的な諸概念の代わりになる」(XIII, 244f.)。さらにその二としてこれ等原初的な諸概念の「基本的結合形式」を確定しなければならない。例えば连接的結合、仮言的結合等である。第二に、これ等範疇的諸概念に基づいて、「複合と変形的変形の可能的諸形式」を明らかにしなければならぬ。例えば推論の諸形式等である。第三に、こうして出来上がった諸形式を一定の処理の秩序によって概観したり、相互に変換したりする。これは「最も普遍の意味での『形式的数学』あるいは多様体論(=集合論)、この近代数学の最高の花形」(XIII, 250)をモデルにして可能である。即ち個々の形式を元とする集合(=多様体)を考えるのである。ここで集合とは「その領域の諸客観にとっては、かくかくに規定された形式(ここでは唯一規定するものである)の或る基本法則の下にある或る結合が可能であるということ」(ibid.)によってのみ規定されている領域である。この第三点に関するフッサールの考え方は理解し易いものではないが、純粹論理学が種々の領域(意義範疇の三層と対象的範疇)を含む事を思えば、彼が言わんとしていることはそれ等諸領域を元とするその総括のことだとも考えられる。事実彼は各グループの説明に際し絶えず、意味範疇には対象的範疇が対応することを注意しているし、また意味範疇の内部でも、例えば「基本的結合形式」に関して连接的結合や仮言的結合という

狭義の論理学の形式と並んで、主語形式や複数形という文法規則を挙げているから、これ等の三つのグループの課題は狭義の論理学だけには限らないということが分かる。この第三のグループについては他の解釈も可能だが、少なくとも公理系の設定による整合的な体系の構成ということではなさそうである。(学説史的に見ても『論理学研究』の時点ではまだ公理的集合論は成立していない)。そうであればこの課題の解決はフッサールの微かな願望の域を出ないであろう。今のわれわれの問題にとってもこの第三点はあまり重要ではないので度外視し、第一点、第二点についてだけ少々触れておきたい。無矛盾性の論理学と現代論理学とを対比して言えば、「原初的な概念」の確定は用いる記号の意味、用法を明確にする即ち論理記号の設定に、「基本的結合形式」は記号を結合して命題を構成する構成規則を定める即ち論理式の設定に、「複合と変様の變形の可能的諸形式」を明らかにするというのは命題間の導出や變形の規則即ち代入規則等の変換規則を規定することに当たるだろう。まだ特定の公理系の選択が残されているが、これは上述のように彼の叙述でははっきりしていないが、ひょっとして第三グループが含意していると解釈すべきかもしれない。このように彼の「数学化的論理学」の構想は彼以後の論理学の展開をかなりの程度において先取りしたものとさええよう。しかしフッサールの場合原初的な概念を基本に据える規則はあくまで意味なものとの規則、あるいはその代理であって、無意味な記号の演算ではないことに注意しなければならない。また純粹論理学的文法と例えばチョムスキーの變形生成文法とを対比してみれば、やはり「原初的な概念」の確定は用いる記号の意味、用法を明確にすること即ち文、名詞句、限定詞等に略号を当てることに、「基本的結合形式」は要素が結合し、有意義な単位を構成し、さらに文を構成する関係即ち基底部規則(句構造規則)に、「複合と変様の變形の可能的諸形式」を明らかにするというのは消去、移動、付加等の變形規則に当たるだろう。このような規

則は体系性を考慮しつつもあくまで経験的な事例分析から出発して明らかにされた文の本質構造であり、無意味な記号の演算ではないことは言うまでもない。こうしたわれわれの対比が正しいとすれば、ここでもフッサールの見通しは過っていなかったことになる。なお彼の場合無矛盾性の論理学は意味論によって補完されなければならないのだが、おそらく純粋論理学的文法も同様の補完を必要とするであろう。そしてこの補完には単なる分析的、形式的手法ではなく、総合的、実質的観点が要求されることは言うまでもない。

二 形式主義の問題

前節でフッサールの純粋論理学の特徴を三点にまとめてきたのだが、既に度々触れたように、その三点を通じて変わらぬ彼の根本思想は反形式主義即ち、論理学を一種のゲームとする考え方に反対することにある。ただ注意しておかなければならないことは彼が形式主義には反対するもののいわゆる公理主義にはむしろ積極的に意義を認めているということである。彼は数学に関してではあるが、そして公理主義という用語こそ用いないが、「どのような論理的形式に従うのであれ、上記で特筆した公理的諸概念から形成可能ないかなる命題も公理の純粹な形式論理的帰結であるか、反帰結即ち公理に形式的に矛盾するかであり、この場合矛盾相当が公理の形式論理的帰結であろう。数学的—限定的多様体においては『真の』という概念と『公理の形式論理的帰結』という概念とは同値であり、同様に、『偽の』という概念と『公理の形式論理的帰結』という概念とは同値である」(III, 167)と言う。公理主義が即形式主義ではなく、その一つの有力な解釈が形式主義というものである。フッサールは数学的演繹的体系の意義を十分承認しているのであり、反対するのはその体系を無意味な記号のゲームとする解釈に対してである。

彼は『算術の哲学』（一八九一年）において、アルゴリズムはあくまで概念的思惟の操作の代用でしかないとしているが、もともと心理学主義をとっていた時代からのこの基本的姿勢は反心理学主義に転向してからも変わることはなかったのである。同年のシュレーダーの『論理学の代数に関する講義』に対する論評でも論理学の代数化自体を批判するのではなく、そうした体系に意味を与えるところの思惟へ還帰すべきことを要求している。『論理学研究』ではお馴染みのチェスの譬えが持ち出されて論じられている。「チェスの駒はゲーム中に、象牙や木等で出来たかくかくしかじかの形と色のものとして考察されるのではない。チェスの駒を現象的、物理的に構成しているものは全くどうでもよく、任意に替えることができる。チェスの駒がチェスの駒に、即ち問題のゲームの道具になるのはむしろゲーム規則によるのであり、この規則がその駒に確定したゲーム意味を与えるのである。かくして算術的記号もまたその根源的な意味と並んで、計算操作のゲームとその周知の計算規則とに従って定められている、言わばゲーム意味を有している」(XXIX/1, 74)。「したがって記号的—算術的思惟と計算との領域では無意味な記号で操作されるのではない。算術の意味によって生かされた元の記号を代理するのはあらゆる意味から解放された物理的記号という意味での『単なる』記号ではなく、むしろ算術的に有意な記号を代理するのは或る操作意味またはゲーム意味とみなされた記号である」(XXIX/1, 75)。つまりゲームにはゲームなりの規約上の意味があるのだが、根源的な概念的意味の代理ということを忘れてはならない。「いかなる記号も何か或るものに対する記号」(XXIX/1, 30)であり、ここで記号と言われているものは言語である。ゲーム意味はこの労力を節約するための代理の役割を果たす。こうしたフッサールの考え方は論理学なり数学なりが二十世紀初頭に劇的展開をみせる以前のまだ旧式な思想だとして一掃してしまえるものではないと思われる。もしそれ等の学が無意味な記号の演算にとどまる

のならば、公理系から無矛盾なかたちで導出されたものを真とするのだから、なるほど真とは何かとか、事象に真に対応しているかどうかとかという問題に煩わされずに済むであろうが、しかしそうした学が単なる比喩としてではなく本当にゲームにしか関わっていないのであれば、それは学とすら言えないのではないだろうか。またそうして出来た或る一つの体系がたまたまその適用のモデルを現実の経験界に見出す、または適用可能だと解釈する場合でも、元々現実とは全く無関係なゲームが現実には適合することなど余りにも僥幸としか言えないことではないだろうか。あるいはむしろ適用とか適合とかが問題ではなくて、逆にゲーム規則に合わせて現実を見る、または現実をゲームと見るというのであれば、複数の恣意的なゲーム規則系の中でどの系を選択するかの基準はどこにあるかを考えてみれば、やはり事象そのものの中に、としか言えないのではないか。少なくともチェスというゲームについては、その一つのモデルとして現実の戦闘があるのではなく、戦闘をゲーム化したのであり、歴史的には事態は逆である。それともチェスの規則に合うように実際に戦闘を行ってきたと言うべきだろうか。フッサールは「学一般の可能性の制約」という枠内でゲーム規則を考えており、従って時代に逆らって、有意味な記号の論理を考えているのである。彼は三十年後の『形式論理学と超越論的論理学』においても数学に関連して相変わらず同主旨のことを語っている。「新しい形式的数学の本来的に論理的な意味を取り出す作業を著しく阻害し、かつこの数学を密かに推進している志向全体を概念的課題という形式では発展せしめなかったところの、過度に自己を高めるシンボリズム（『記号主義』）の中に自己を失ってしまう危険性が避けられるのは、この数学の理念が論理学の理念の全連関のうちで——『論理学研究』の叙述の仕方によって——建てられる場合だけである」（XIII, 102f.）。換言すれば、「シンボル（『記号』）による演繹的ゲームの単なる学科」を建てるのではなく、「ゲームのシンボルを現実の思惟客

観、統一、集合、多様体のための記号とみなす」(VI, 104) ことが必要とされる。晩年の『ヨーロッパの学問の危機と超越論的現象学』(一九三六年)においてもこの根本思想は不変である。「人は文字、結合記号、関係記号(十、 \times 、 $=$ 等)によって、しかもそれ等に連関をつけるゲーム規則に従って、実際にはトランプのゲームやチェスのゲームと本質的に変わらない仕方で作る」場合、「本来の学的意味に還帰することではなく」、「本来この技術的処理に意味を与え、規則に適った結果に真理(例えば形式的普遍数学に特有の『形式的真理』であろうとも)を与える根源的思惟はここでは排除されている」(VI, 46)。だからこそ「意味の空洞化」が起こり、そこからまた学の危機を招くことにもなったのである。フッサールにとって論理学は相対的に自立的ではあっても、単なる記号のゲームではないのだから、その根源の意味と起源とが問われなければならないのである。

三 超越論的論理学へ

カントの場合「超越論的」という概念はアприオリな可能性を持つ認識の、その認識仕方に関わるものであり、しかも「経験一般の可能性の制約が同時に経験の対象の可能性の制約である」といういわゆるコペルニクスの転換の視点からである。フッサールも「超越論的」という術語をカントから継承しているのだから、コペルニクスの転換の立場をとることには違いないのだが、しかしこの語の使用法はカントの場合ほど厳密ではなく、こうした立場から見られた概念には何でも超越論的という形容詞を被せて用いるほどである。「私自身は『超越論的』言葉を最も広い意味で、以下のような原初的動機……即ちデカルト通じすべての近代哲学に意味を与えるものとなった動機、そしてこれらすべてにおいて自覚されるに至り、真正で純粹な課題の形態と体系的な成果を得ようとする動機であ

る。それはすべての認識形成の究極的源泉を遡って問おうとする動機であり、認識者が自己自身と自己の認識する生を自己反省しようとする動機に対して用いる」(VI, 100)。とにかく「超越論的」という概念によって単に主観的観念論の立場が表明されているに過ぎないと見做される恐れがあるだろう。しかし一面ではそれは「超越的なもの」を可能にする働き、即ち認識における媒介そのものである主観の機能を表しているのである。この機能なくしては、超越的なものはなるほど仮にそれ自体として存立しているものと言い得るにしても、少なくとも認識されたものではあり得ない。この機能は受容性と自発性、入力と出力とを媒介する一種の転輸装置であり、さらに、この中心的なものはカントではカテゴリー、フッサールでは言語である。また他面でそれは認識における媒介機能を反省する一種のメタ認識であり、自己反省の機能でもある。このように解するならフッサールが「最も広い意味」と言っている事態が理解できる。

ところでカントの「超越論的論理学」はわれわれが対象をアプリアリに認識する限りでの純粹悟性および純粹理性の働きを、それぞれ分析論(判断論)、弁証論(推論)として解明することを課題とする。彼の場合感性に与えられた多様なものは悟性の材料として働くのみであり、重要なものはむしろこれを処理する悟性の働きである。したがって超越論的論理学は悟性や理性の機能を解明することを中心的テーマとする。これに対しこの課題も確かに「認識形式の究極的源泉を遡って問おうとする」ものには違いないのだが、フッサールはカントとは逆向きに、さらに感性論(前述語的判断の理論)の方に向かって「遡って問おうとする」。伝統的論理学(歴史的に生成してきた形式論理学)の中心には述語判断、あるいは命題という概念があるのだが、この概念は比較的に高次のものであり、その底には伝統的論理学には不問に付されたままの「隠された前提」がある。つまり述語的判断の起源がまず

問われなければならないのである。そして「その（＝構成的現象学）枠内で述語的判断の起源の解明は論理学の発生論の基礎課題として組み込まれる。そしてこの発生論はこの地平全体のなかで理解され、その完全な包括的意味で考えられるなら超越論的論理学になる」(EU, 50)。つまり「生の世界の経験の明証への還帰」(EU, 51)が後期フッサールの課題となったのである。彼が論理学の発生論にこれほど深く沈潜しなければならなかったのは規約主義の論理学だけで満足できず、なぜそうした規約が発生し、また有効であるのかという問題意識があったからであろう。もともと彼もゲームとしての論理学の意味を認めなかったわけではなかったのだが、その原初的意味のほうはさらに重要なものと考えたのである。「素朴な明証から発生したものである論理学はいかなる適用可能性も持たず空高く漂っているべきものではないとすれば」(XVII, 273)、あくまで根源的明証に還帰しなければならぬのである。このドクサの世界からエピソードの領域への移行過程については、例えば『経験と判断』にその分析がみられる。まず最低次の層として受動的な連合的機能によって対象がわれわれ予め与えられる。さらに、この受動的綜合のベースの上に自我が自発的に働きかけ、述語的判断が形成される。最後に最高段階として、本質観取によって普遍的、必然的認識が得られる。今はその詳細は省略するが、とにかく普遍性といえどもその起源は受動的なものの中にその根があるとされているのである。因に彼が「事象そのものへ」ということを唱え始めたのは『論理学研究』においてであり、それを最も力説したのは『形式論理学と超越論的論理学』においてであった。

付記 本稿は第十四大阪カント・アーベント例会（一九八七年七月十一日、大阪大学文学部）において発表した「フッサールの超越論的論理学について」の草稿を基に、当日頂いた御批判を加味した上で補筆したものである。しかし題目に掲げたテーマに直接関係する第三章についてはむしろ削除した部分のほうが多い。これに関しては改めて別稿として発表したいというのが筆者の希望であり、この点当日の参会者諸兄にお詫び申し上げたい。

（大阪大学文学部助教）